

| | |
|--------------|---|
| Title | 岡野廉平翁を送る |
| Author(s) | 木村, 英一 |
| Citation | 懐徳. 1975, 45, p. 48-49 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/90531 |
| rights | |
| Note | |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

吳山社と吉田先生

酒井全太郎

編纂して頒布の勞をとって下さった。そして吳山社の名は江戸時代に田中桐江が池田に吳江社を創って池田の文化に資したのに因むのであった。この拙文は吉田晉氏の記事中吳山社の項に應じて記したものである。

又含山社の詩盟は凡そ、次の諸士であった。

高橋虚庵、小原蘇谷、弘末楚山、中尾抑處、酒井鳴谷、藤本碩石、湯川鳥山、佐野碧玲、春原玉英、松田臥雲、白井文溪、林田瓜牛、森 針渠、山本楢信、多田岑影、高橋策山、益満素堂、末永夕秀、丸山朱樓、田中翠江、山崎春崗、平田二松である。

岡野廉平翁を送る

木村英一

懷德堂教授吉田先生は謹嚴篤學の儒士であった。常に出勤されると素讀生に素讀を教へ週何回かの講義をされて、遅く帰宅される習慣であった。當時は豊後町に堂があったので、そこから徒歩で電車に乗られるために聽講生數人と共にして本町の電車停留場まで、何かと種々の話をききつつ別れたのであった。北京より歸朝された後、引きつづき御出講下さって、論語や、水滸傳などの講義をされたのであるが、これは主に白話で原文を讀まれたのであった、これは新機軸であった様に思った。

その間先生は主宰者となって吳山社を始められた。昭和五年五月二十一日池田の大廣寺退老堂に盟友を結集して吳山社の第一回の雅會が開かれた。その後毎月一回の集會を持つに至った。そして會の世話は先生獨りが専ら當られて居った。因みに初めの結集時の雅友は中井黄裳・岡山雲介・西田樗堂・林田炭翁・吉田北山の五士であった。その雅會の間にこれに參會した詩盟は凡そ三十餘名を名簿に記されて居る。この長い間に含山社謄録を

岡野廉平氏は、大正十一年一月一日に懷德堂記念會の幹事に就任されてより、今年に至るまで實に五十三年の長きに亘って勤續され、昭和三十七年四月一日以來は評議員をも兼ねておられた。本年八十歳の高齡に達せられたのを機に、五月末日を以って一切の公職を辭され、郷里に退休された。思えばこの半世紀の間、堂に出入した

者のお世話を蒙ったことは量り知れないものがあり、氏の記念會につくされた功績は、まことに甚大である。

氏は壯年より住友の社員として、一貫して今日まで忠實にその職を果された。この方面については、語るに別にその人があろうが、仄開するところによれば小倉正恒翁の推挽を受け、氏も亦終始よく翁に事えられた。翁と氏との關係は懷徳堂記念會内においても、翁が歿年まで理事長として堂務を主宰された期間を通じて、氏は常に忠實な幹事であった。そして小倉理事長の歿後、今村・上野・北澤の三理事長および堀田現理事長の下でも、氏は引きつづき幹事の職に留って今日に至られたのである。

しかし氏の、老後は故山に退休したい、というお考えは、平常からの宿願であつて、今年八十歳に達せられたのを機に所志を實行に移されたのである。「功成り名遂げて身退くは天の道なり」というのは、老子の名言である。今、氏の高風を思うにつけても、我々としてはまことに惜しい限りではあるが、この上留任を請うすべもない。

去る五月二十四日、我々堂友會の有志數名は、天王寺公園畔の廣田家に席を設けて、送別の小宴を張った。私も亦その席に列つたので、座興のつもりで、請われるま

まに拙詩を書いて氏に贈り、藤塚老人に代つて吟詠してもらつた。岡・野・廉・平という四字を各句首に用いよという注文もあつて、

送岡野廉平翁退休故山

一

岡。巒起伏海南莊、野。徑幽花日漸長、廉。讓屈伸塵世裡、平。生志願得歸鄉、

二

岡。近生美竹、野。遠見飛禽、廉。恥白華教、平。淡父老心、
陶朱扶業阪都邊、魯務兼勤五十年、九峽今朝思故里、
また
光風朗月雨餘天

翁の故郷は伊勢志摩で、東海に近い一仙境だと聞いている。ますますご健康で、南山の壽を養われ、風月を友として樂しまれることを祈つてやまない。